



「緑字企業報告書2008」に対する意見

京都文教大学 現代社会学科
教授 島本 晴一郎
(京都CSR研究会幹事)

はじめに:

緑字企業報告書2008は同社のブランド価値である自然、社会との共生を全面に掲げた環境・社会報告書である。その内容は「いきいき」を提供するという自社独自の経営理念に基づいて、各ステークホルダー別にわかりやすく構成されている。またECO単位という評価指標により、企業の環境、社会に関する目標を指標化し、その全体活動に関する実績を逐年報告するいわゆる「緑字決算」の手法は、いわば同社のオリジナリティとして定着したといえる。

内容について:

同社の経営理念は「人間の健康的な暮らしと、生き生きとした社会づくりに貢献する」ことにある。この報告書では、消費者の安全性を確保するために、製品ラベルにおいて表示義務を上回る品目数のアレルギー表示に踏み切ったことや、賞味期限を過ぎた「とそ散」の自主回収ならびにその後とられた対応についても詳細に公表されている。また、社会の「いきいき」のために、2008年3月より、「TaKaRa田んぼの学校」のホームページにおいて「クリック募金」を設け、自然活動に取り組むNPO支援のための代行寄付を開始したことが記載されている。このほか、積極的に大学生、大学院生のインターンシップを受け入れ、企業の自然環境への取り組み方を学ばせる機会を年々増加させる一方、京滋地区の5つの芸術系大学と京都府の連携で京都環境ポスター・コンクールを支援するなど若い世代への「いきいき」の提供活動は年々厚みを増していることが読み取れる。

ところで、上記の諸活動は、社員の「いきいき」によって支えられており、本報告書では、職場と個人生活のバランスが最大限に配慮されている実態が具体的に描かれている。例

えば育児休職中の職場復帰支援プログラムや、育児休職制度の利用が順調に伸びている点や、当年度においては男性の育児休職制度が新設されたという記述から、今後社員の育児への参画が積極化することが予想できる。また本報告書によれば、身体障がい者の雇用率が堅調であるのに対し、女性の雇用比率についてはやや低迷している感がある。今後、環境、人間の健康、社会的ニーズの面で、同社の企業価値を向上させていくためには、よりきめのこまやかな生活感覚と、洞察力が旺盛な女性の能力を活用することが得策であると考えられ、早晚女性の雇用率の上昇が予感される。このように本報告書の持つ事実の経年的記述は同社の近未来的な予測を可能にする意味でも意義がある。

本報告書では同社のコンプライアンス体制についても詳しく報じている。コンプライアンスとは一般的に敷衍された法律違反問題の有無ならびにその予防体制に集約されやすいが、本来はより広く企業の経営理念(社会性)に合致した行動が取れているかどうかをチェックすることである。この意味で、コンプライアンス委員会の活動内容、あるいはヘルプラインの利用率並びにその内容にまで、踏み込んで本報告書で明らかにできれば画期的であり、社会・環境報告書としての意義はいっそう高まるものと思われる。

同社の緑字企業報告書としての真骨頂は、生産工程から流通販売に至るまでのマテリアルバランスを計測し、環境への負荷数値目標値と現実値とのギャップをフォローしている点である。また同社の環境と社会の総合的な進化を把握する観点から、社会性指標として社員のボランティア活動参加人数、社会貢献活動費用を加えて全体で11の指標にまとめ、単一の総合指標として経年的な比較を行っている点は極め

てユニークである。今次決算では、当初の目標値である2004年度実績比+4ECOを上回る+7ECOを達成している点は大いに評価できる。環境指標については、工場廃棄物の削減率が道半ばであること、オフィス部門の電力使用量の削減率が未達である点などが留意点として残るが、このようにその詳細内容を個別に数値化することで、客観的に同社の置かれた立ち位置がより良く把握できる。ちなみに本報告書では社会性指標は結果のみで、その詳細内容の記述が無いのがやや物足りないが、この点については今後の工夫が期待される。

最後に:

同報告書の読者アンケートによると、同社の報告書は極めて好評であるが、その背景には、地に付いた分かりやすさと同時に具体的かつ詳細な数値目標による合理性があるからであると推測される。おそらくは地道に生産をする人の実態と苦勞が伝わることで、数値も生きてくるのだろう。その意味では、今回の特集では宝焼酎「純」を取り上げ、一つの製品が誕生するまでのさまざまな苦勞を社員の見方から描いており、それ自体理解を容易にする点は評価できる。ただ、さらに欲を言えば緑の下で頑張っておられる人たちの声、あるいは工場と地元との草の根の交流が加味されると、よりビビッドに「いきいき」が伝わったであろうと思われる。いずれにしても、同社の緑字企業報告書は、より実実性、透明性、継続性の原則を踏まえた社会・環境報告書としての性格を年毎に高めつつあり、今後ともその公式報告書としての意義を高めていくことが期待される。このためには、本報告書に記載された内容、あるいは数値評価の結果を、同社の企業経営の中核的な認識として真摯に受け止め、今後の経営計画にも反映していくことが必要と思われる。



表紙について

この写真は、2007年4月に当社の主催する社会・環境プログラム「TaKaRaお米とお酒の学校」田植え編で撮影されたもので、参加されたお子様がお米の苗を手にかけているところです。私たちは、このいきいきとした表情と緑の苗や土の色から、企業理念である「自然と社会と人間との調和」を感じ取れるのではないかと考え、表紙写真に選定しました。

●編集後記

環境広報部長 佐藤 浩史

本報告書では、一企業市民として、社会の様々なステークホルダーの皆様との関わりをご報告しています。本年度は特に主要の酒類事業において重要性の高い「安全・安心」への取り組みを特集でご紹介しました。また昨年のステークホルダーミーティングでのご意見を反映し「社会のいきいき」に関する活動の記載を充実しています。今後も本報告書を通じて活動結果や方向性をお伝えするとともに、ステークホルダーの皆様との対話や協働を進めることで、皆様の「いきいき」に貢献できる活動を推進してまいりたいと思います。

●編集体制:

- ・環境統括会議(宝ホールディングス(株)・宝酒造(株) 役員、グループ会社社長 計13名)
- ・編集委員会(CSR推進部門、広報部門、IR部門、経営企画部門、総務・人事部門、営業部門、商品開発・宣伝部門、購買・製造部門、品質保証部門、お客様相談部門、環境部門 計17名)
- ・編集責任者:中尾 雅幸(環境課長)

●発行責任者:佐藤 浩史(環境広報部長)